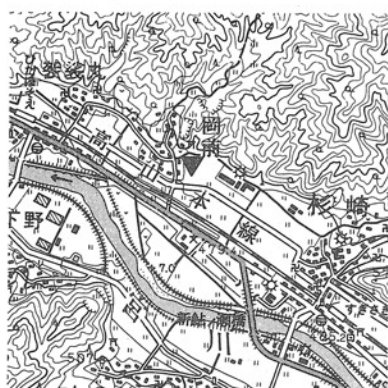


岐阜・杉崎廃寺

すぎさきはいじ

- 1 所在地 岐阜県吉城郡古川町杉崎字淡原^{あわら}
- 2 調査期間 一九九一年(平3)一〇月～一九九四年九月
- 3 発掘機関 古川町教育委員会
- 4 調査担当者 大野政雄・戸田哲也・河合英夫
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 七世紀末葉～九世紀初頭
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(飛騨古川)

飛騨古川盆地の北西隅、吉城郡古川町杉崎字淡原地内に所在する杉崎廃寺は、飛騨の風光明媚な田園地帯にあって、古くから水田中に整然と並ぶ金堂礎石と、二重孔式の塔心礎の存在が知られ、一九五九年(昭34)に岐阜県の史跡指定を受け、現在に至っている。耕作によって金堂基壇の蚕食が進行したものの、『斐太後風土記』(一八七三年)に「里人敢て其を動かさず」と記

されているように、金堂礎石は永く水田中に保存され、古来の位置を保ってきた。またこの東に接して、塔跡と推定される地形の高まりがあって一〇個ほどの礎石が現存するが、塔心礎は南東方に四〇mほど離れた道端にある。これらの礎石群を残す杉崎廃寺は、これまで平安後期から織豊時代にかけて天台宗寺門派の法燈を維持した宮谷寺^{みやうじ}の跡とされてきた。

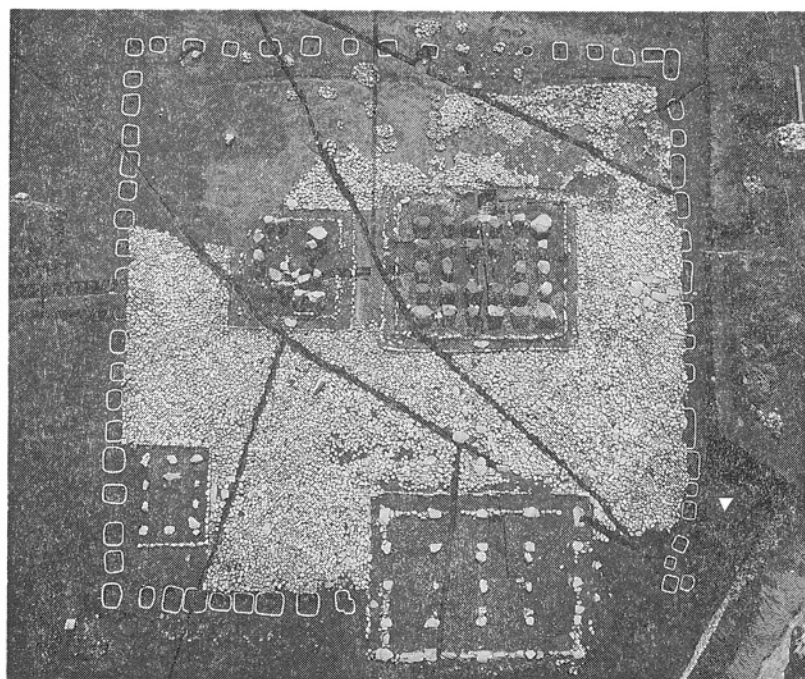
この杉崎廃寺の一带に、県営土地改良総合整備事業が計画されたため、古川町教育委員会は事業と遺跡保存の調整を図ることを目的に、一九九一年度に廃寺の範囲確認調査を実施した。その結果、塔心礎は後世に移動していること、金堂や塔の基壇が良好に遺存すること、その周囲には石敷が存在すること、さらに金堂後方にも新たな礎石建物が存在することなどが明らかになり、かなりの規模の伽藍をもつ寺院跡であることが判明した。このため一九九二年度からは、国・県の補助を受け、伽藍配置・寺域・創建年代などの解明に向けて発掘調査を実施してきた。

このほど伽藍中枢部の調査がほぼ終了し、法起寺式の伽藍配置をとる白鳳寺院であることが明らかになった。伽藍は小規模ながら、中門・金堂・塔・講堂・鐘楼(経蔵)などの主要堂塔を備えた本格的な寺院であり、伽藍配置が明確になるとともに、伽藍の区画施設である掘立柱塀や内部に敷設した石敷の状況も明らかになるなど、伽藍中枢部の様相をほぼ解明することができた。また、伽藍の西で検

出した南北溝は、西面の掘立柱塀に近接した位置にあるが、その方位や出土遺物からみて、寺域の西を限る排水施設と推定される。

杉崎廃寺は、これまでに七〇〇カ所以上で確認されている飛鳥・白鳳寺院のなかでも特に残りがよく、伽藍全体がこれほど良好な状態で遺存した例は少ない。当時の伽藍の造営計画や建物の形式・構造を明らかにし得る点で高い価値を有している。また仏教文化や寺院建築の東国への波及の実態を明らかにする上でも貴重な調査例といえる。こうした遺跡の重要性に鑑み、古川町は伽藍地全域の保存を決定し、史跡公園として伽藍中樞部の露出展示を検討している。

遺物は、伽藍中樞部と南北溝を中心に整理用コンテナで約一〇〇箱ほど出土した。伽藍中樞部から出土した遺物の大部分は、土器と瓦類である。土器は須恵器類が大半を占めている。杯・碗・蓋を中心とする食器類と、壺・甕などの貯蔵容器類が主体であるが、水瓶・浄瓶・鉄鉢・三足火舎などの仏器もみられる。これらの多くは講堂及び僧房・食堂などの存在が推定される伽藍の北側から出土している。焼失した講堂の基壇上面から出土した杯類の多くは、内面にタール状の付着物が認められ、講堂内で灯明皿として使用されたものと推定される。また多くは底部に糸切り痕が残り、これらが杉崎廃寺の廃絶年代を示す資料と考えられる。飛騨地方の須恵器の年代観はいまだ流動的であるが、ここでは一応九世紀初頭の年代を与えておきたい。墨書土器は十数点あるが、寺に関わるものとして「見



杉崎廃寺の遺構（上空北から） ▽が木簡出土位置

寺」「寺見」「寺」などがある。また、講堂基壇土中及び掘立柱塀の柱穴からは、寺の創建年代を示す資料となりうる岩崎四一号窯式に比定される須恵器が、柱穴からは平城宮Ⅰに比定される土師器杯Aが出土しており、須恵器の年代観とも矛盾しない。

瓦類は、金堂及び塔の基壇回りを中心に出土したが、軒瓦は一点もない。また全体の出土量は、屋根全部に暮く量としてはあまりにも少なく、部分的な使用であったと考えられる。

一方、南北溝からは木製品が多量に出土した。建築部材が中心であるが、杓子や箸などの食器具、挽物や蓋板などの容器、えぶり・田下駄・木槌・撥・へらなどの農工具など多種にわたっている。また、特記すべきものとして建築模型の部材の組物(斗)と鐫木が挙げられる。木簡は現在わずか一点であるが、建築部材とともに出土した。飛騨国荒城郡の郷名が推定できる唯一の考古資料である。なお、墨痕のない木簡状木製品が南北溝を中心に十数点出土している。

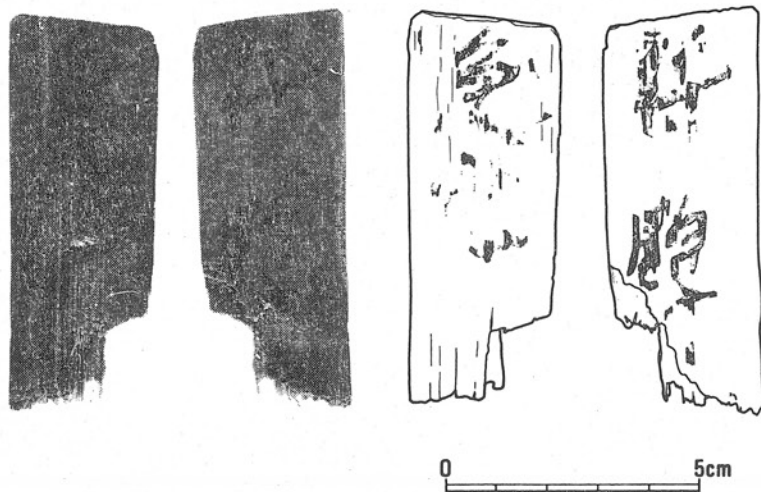
8 木簡の釈文・内容

(1) ・「符 飽」^{〔見カ〕}
□ ×

・「急」
□

(80) × 30 × 7 019

(1)は上端は完存しているが、途中で折れ全体の形状は不明である。
「飽」^{〔見カ〕}□は、『和名抄』にみえる飛騨国荒城郡飽見郷^{あくみ}を指すものとみられる。符は公式令によると上級官司が被管官司に出す下達文書





墨書土器（部分）
「見寺」

であり、これは郡から郷への符、すなわち郡符木簡である可能性が高い。欠損のため内容の詳細については不明であるが、急を要する内容であったことが推察される。木簡の年代は、共伴した土器から寺が焼失した九世紀初頭頃と判断され、岐阜県下では初めての古代の木簡である。

古川盆地には杉崎廃寺を始めとする白鳳寺院の推定地が一〇ヵ所あり、その分布をみると一定の領域を単位とした寺院の建立が看取される。狭い盆地内の随所に伽藍が立ち並ぶ景観は、当地域の先進性を象徴するものといえようが、古代律令制国家における飛驒の特殊性を考慮するならば、賦役令斐陀国条にみえる工匠の供給との関係が想定されるところである。また、郷名が記された郡符木簡との関連でみるならば、七郷からなる荒城郡内に郷を単位とした寺院の造営が可能な状況を含め、今後の検討に委ねたい。

9 関係文献

河合英夫・島田敏男「飛驒の伽藍―杉崎廃寺の調査―」(『月刊文化財』三六六 一九九四年)

(河合英夫)

木簡研究 第一五号

巻頭言

早川 庄八

一九九二年出土の木簡

概要 平城京跡 平城京左京三条三坊三坪 平城京右京三条二坊三坪 藤原宮跡 藤原京右京五条四坊 丹切遺跡 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 中海道遺跡 勝龍寺城跡 平安京跡・旧二条城跡 鳥羽離宮跡 大坂城跡 大坂城下町跡 喜連東遺跡 平野環濠都市遺跡 植附遺跡 袴狭遺跡(内田地区) 鴨田遺跡 六六B遺跡 安養寺跡 宮の西遺跡 赤堀城跡 梶子遺跡 城之内遺跡 二本柳遺跡 二之宮宮東遺跡 安養寺森西遺跡 世良田諏訪下遺跡 小茶円遺跡 番匠地遺跡 瑞巖寺境内遺跡 八幡林遺跡 綾ノ前遺跡 馬場天神腰遺跡 乾遺跡 宮永ほじ川遺跡 北高木遺跡 山崎遺跡 中島田遺跡 久米窪田森元遺跡 観世音寺跡(南門跡) 協道遺跡 城原三本谷南遺跡 妻北小学校敷地内遺跡

一九七七年以前出土の木簡(一五)

一乗合朝倉氏遺跡(第九次) 長岡宮跡(宮第三一・三三三) 草戸千軒町遺跡(第五・六・八次)

国・郡の行政と木簡

―「国府跡」出土木簡の検討を中心として

京都府相楽郡木津町鹿背山郷蔵の俵上札

加藤 友康
田中淳一郎

頒価 四五〇〇円 千五〇〇円